

## 第 49 回語学ゼミナールに参加して (M. Arij) [J]

たくさんの刺激を受け、非常に密度の濃い4日間だった。

講演はもちろん、質疑応答も含め、ほとんど全てのイベントがドイツ語で行われたため、学部時代の留学を思い出し、コロナ禍もあって少々くすぶっていた「生きたドイツ語 (リアルなドイツ語)」への情熱が再燃した。従来はゲストの先生方を含め参加者全員が同じ宿泊施設に泊まる合宿形式だったそうだが、今回は自分で宿泊場所を確保するところから始まったため、小旅行(あるいは小留学)のようで少しワクワクした。

今回の語学ゼミナールは、近畿大学の東大阪キャンパスで開催された。最寄り駅から徒歩で向かったが、会場となるキャンパスに至るまで学生向けの飲食店など様々な店が立ち並び、道々すれ違う学生を眺めながら、彼らの学生生活に想いを馳せてみたりしていた。掲載した写真にある立派な門(西門)に迎えられて大学構内を歩く。するとガラス張りの近代的な建物が立ち並ぶ中に、先の西門と同様の落ち着いた赤のレンガの壁面が見え隠れする。非常に綺麗なキャンパスだな、と感じた。

今回の語学ゼミナールは、以下のような日程で行われた。

1日目(2023年8月28日)は午後15時より、さっそく Damaris Nübling 先生(マインツ大学)の1つ目の講演が行われた。テーマはドイツ語の形態的変遷の原理に関するもので、形態変化に関わる動詞の機能スケール(Relevanzskala für die verbalen Flexionskategorien im Deutschen)を用いて説明して下さった。機能スケールは、人称(Person)、数(Numerus)、語法(Modus)、時制(Tempus)の順に形態変化への関連性が高くなっていくもので、人称に関しては、歴史的に形態変化への関連性が低くなっていることが中高ドイツ語と現代ドイツ語との比較を通して確認された。

2日目(2023年8月29日)は、午前のプログラムにおいて動詞の母音交替(Ablaut)に関する Nübling 先生の2つ目の講演がなされた。動詞を8つにタイプ分けして現在形 — 過去形 — 過去分詞と変化する中でどのように母音交替がなされているのかを分析した結果、ABBタイプ(reiten-ritt-geritten, bieten-bot-gebotten など)が最も多く(次にABCタイプ(singen-sang-gesungen, helfen-half-geholfen, nehmen-nahm-genommen など)、最後にABAタイプ(geben-gab-gegeben, graben-grub-gegraben, schlafen-schliefe-geschlafen など)、一方で頻出動詞ではその多くがABAタイプであることを示していただいた。また、中高ドイツ語からのタイプの変遷やスウェーデン語の事例などもご紹介いただいた。午後にはゲストの Holger Steidle 先生(淡江大学)による講演が行われた。同講演は、「知識」および「学ぶ」ということに関して、ライプニッツの時代にまでさかのぼって歴史的な側面も踏まえながら、哲学の視点から考える、というものだった。今後「知識」を伝えていく側になることを望む自分自身の立ち位置に鑑みると、同講演は、学生という立場として「学ぶ(知識を得ること)」ということ、そして伝える側として「学びを生む(知識の定着、知識の種類など)」ということに関して、あらためて根本から考えてみる重要な機会となった。

3日目(2023年8月30日)は午前のプログラムにおいて、Nübling先生の3つ目の講演を拝聴し、人間と動物の違いは語彙的に現れるだけでなく文法的にも影響を与えることを学んだ。この3日目の夜には、キャンパス内の食堂で懇親会があり、先生方、他大学の学生さんたちなど様々な方々と交流を深めることができ、素晴らしい機会をいただけたと感じている。

2日目および3日目の講演後は、様々な先生方および博士課程の先輩方が興味深い研究発表を行ってくださった。著作権等の都合により内容や題目などの明示は避けるが、どの発表においてもある事象に関して多様な例を挙げながら明快に説明していただき、皆様の熱意ある発表を拝聴したことで、自身もより一層研究に精進せねばと奮起した。

最終日(2023年8月31日)には、午前のプログラムにおいて日本語によるワークショップがあり、Nübling先生を除く参加者だけで3日間の講演内容を確認した後に、疑問点などを出し合って整理した。発表を行っていない学生が書記を担当し、午後のプログラムではNübling先生をお招きしてディスカッションを行い、前もって書き留めていた質問をドイツ語で投げかけることができた。

Nübling先生は3つの講演を通して、それぞれ事例を挙げながら非常に分かりやすく説明してくださった。特に動詞の母音交替に関しては、現代でも変化が続いているということが、新聞やネット上の記事などを資料として例証されたため、ドイツ語への興味がまた一段階深まったと感じている。また、学生による発表の際には同年代が活躍する姿を間近で目にし、とても良い刺激となった。

初めての参加で不安もあったが、今回の語学ゼミナール全体を通して終始和やかな雰囲気に入れ、実行委員の方々の手厚いサポートもあり、とても楽しく過ごさせていただいた。参加費や宿泊費の補助も行っていただき、遠方からであっても参加することができたことも、ここに感謝の念とともに付記させていただきたい。

また機会があれば、ぜひ参加したいと思う。

有路 真奈(東北大学博士後期課程)

会場となった近畿大学の西門



0198

作成日 : 2023/10/30